

2013 年度グローバル地域文化学部自己点検評価報告

I. 教育活動

学部開設初年度にあたる 2013 年度の教育活動について、科目別に要点をまとめる。演習系の必修科目「グローバル地域文化導入セミナー」は少人数クラス編成で、勉学を進める上で大切な心構えおよび基本的な技能（文献の検索、テキストの要約、口頭発表、レポート）などについて、きめ細かい指導を行った。学生同士での意見交換やディベートを推進することにより、勉学に対する積極的な姿勢を培った。

講義系の必修科目に関しては、まず 1 年次・2 年次必修科目用の教科書『地域研究への扉：グローバルな視点から考える』（晃洋書房、2013 年 4 月）を編纂した。「グローバル地域文化論」（1 年次春学期）は、ヨーロッパ、アジア・太平洋、アメリカの 3 コースの教員が、テーマごとに順番に授業をするオムニバス形式の授業である。学生に自分が所属するコース以外の地域についても知識を得る機会を与え、地域横断的に問題を比較検討させた。「グローバル・スタディーズ論」（1 年次秋学期）では、環境や移民といった 이슈を軸にグローバル化の現れ方を学びつつ、各学生が専攻する地域のなかに問題点を見だし、その問題に対して説得力のある意見が持てるよう指導した。

選択科目では、コースごとに、当該地域の歴史的形成、文化の多様性に関する講義科目を開講した。映像資料、音響資料を活用し、具体例を示して学生の理解を深めた。学修支援システム（DUET）を利用し、講義関連資料・論文の配布を行った。

選択必修科目であるスタディ・アブロード科目については、語学研修を主目的とした各種プログラムに加え、学部独自科目として新規に立ち上げた「海外インターンシップ」について、春と秋に説明会を 2 回行い学生の理解を深めた。その後、応募・選考試験を行い、2014 年夏の実施に向け、順調に準備が進んでいる。

学生の学習状況全般については、授業出欠状況などの情報共有を教務主任を中心に行い、指導が必要と思われた際には学生を適宜呼び出して、個別の学習指導を徹底した。

学習支援の方策として、「海外インターンシップ」参加者に奨学金を準備している。また外部の外国語（英語・初修外国語）検定試験受験に対し、受験料の補助制度を準備し積極的な受験を奨励している。

II. FD 活動

1 年次春学期開講の「グローバル地域文化導入セミナー」では、授業担当者打ち合わせ会を複数回開催し、授業内容について情報交換をして教育効果の向上に努め、成績評価の平準化を図った。1 年次秋学期開講の「グローバル・スタディーズ論」では、授業担当者が「グローバル地域文化導入セミナー」の授業担当者打ち合わせ会に出席し、春学期科目から秋学期科目へスムーズにリンクする教学上の指導が行えるよう図った。具体例として、「グローバル地域文化導入セミナー」を通じて夏期休暇中に取り組む課題を出し、「グローバル・スタディーズ論」受講に向けての事前学習および課外学習を促した。

2014 年度から始まる 2 年次生向けの演習系の必修科目である「グローバル地域文化入門セミナ

一」の担当者が検討会を開き、授業内容について話し合い、具体的な授業準備を進めた。

春学期に提供された学部科目について全学生対象にアンケートを行った。学生の満足度等について現状を把握するとともに、アンケート結果を授業担当者にフィードバックすることで次年度以降の授業の改善に役立てた。

科目運営の改善に向けて、教学委員会およびコース会議等において 2013 年度の授業運営の反省会、2014 年度の学部科目のシラバスチェックを行った。

学部に自己点検評価委員会を設置し、年度末に「2013 年度グローバル地域文化学部自己点検評価調査」を実施した。専任教員に対しては教育活動と研究活動について、嘱託講師に対しては教育活動についてアンケート形式で回答を求め、結果を集計した。

11 月に徳島大学講師の光原弘幸氏を招いて「デジタルネイティブはドット絵の夢を見るか? : ICT を活用した授業活性化に向けて」というタイトルの FD 講演会を開催した。

III. 研究活動

「グローバル地域文化学会」を立ち上げ、年 2 回、研究機関誌（論文、翻訳、書評、書誌、各種の批評と紹介、会員の活動報告など）を発行した。また 12 月には学術講演会「世界史教育と地域史教育」（講師：桃木至朗・大阪大学文学研究科教授）を主催した。

学部として他の組織と共催した企画としては、7 月の公開講演会「南海における桃太郎の冒険——新渡戸稲造と芥川龍之介を中心に——」（講師：イリノイ大学准教授ロバート・ティアニー氏、文学部人文学会との共催）、10 月のセッション「模倣と創造——日本とヨーロッパにおける文化継承の現象学」（明治大学人文科学研究所との共催）、また国際シンポジウムとして 11 月の「北に渡った言語学者・金壽卿（キム・スギョン）の再照明」（同志社人文研究所、同志社コリア研究センターとの共催）、12 月の「インド人による反植民地主義の越境的軌跡——ヨーロッパと東アジアの経験——」（同志社人文研究所、科研費プロジェクトとの共催）などがある。

教員ごとに、著書、論文執筆に加え、学会発表などを通じた研究活動を活発に行った（詳細は、本学研究者データベース参照（URL: <https://kenkyudb.doshisha.ac.jp/>））。

本学部専任教員の研究グループを対象に、図書およびその他の資料購入、複写利用、資料作成費などに充てるべく、「研究会補助」の制度を設けて、研究会活動を支援した。研究会活動補助を得た研究会は「活動成果報告・経過報告」を年度末に提出し、教授会での回覧に付した。

IV. 国際交流活動

国際交流活動の一環として、次のような各種交流会を開催した。まず、本学部教員と日本語・日本文化教育センター教員との共同企画で、同志社大学に留学し日本語・日本文化を学んでいる学生と本学部生の交流会、また、おもにコリア語教員の企画で、韓国の柳韓大学の産業日本学科の学生たちが志高館を訪問し、コリア語を学ぶ本学部生を中心とする本学の学生との昼食・交流会を企画した。さらに国際教育インスティテュート、グローバル・スタディーズ研究科、政策学部、本学部の共同企画で、烏丸キャンパスで学ぶ数多くの外国人留学生および教員、日本人学生の交流会を開催した。

また海外留学に関する積極的な情報収集と学生への情報提供を試みた。具体的には、Campus

France (フランス政府留学局) 日本支部関西オフィスの担当者と本学部の主任数名が会合をもち、2014 年度以降フランス留学に関する本学部生へのさまざまな情報提供の機会を積極的に作っていくことで合意した。

海外の研究者の受け入れについて検討し、バル=イラン大学 (イスラエル) の A・リップスケル教授の受け入れを教授会にて決定した。本学部教員が受け入れを担当する (2015 年 2 月より 6 ヶ月滞在の予定)。また本学部発足以前から、長年に渡って続いているアーモスト大学からの若手研究者の受け入れも継続して行い、この研究者には英語の授業補助の協力を得た。

国際シンポジウムを共催した (III. 研究活動の項を参照のこと)。

V. 社会貢献活動

さまざまな展示会や映画上映会を企画して、その各活動において関連分野にかかわる人々や市民から積極的な反響を得た。

例えば 5 月に開催した「清水透写真展『マヤの民との 30 年』」(グローバル・スタディーズ研究科との共催) は 200 名以上の来場者を記録し、同時開催した講演「液化化するマヤの世界」にも近畿各地から一般市民や研究者が集まり、講演後に有益な討論が交わされた。6 月の「孤児を支える——ドキュメンタリー映画『グランディール』上映会&講演会——」(グローバル・スタディーズ研究科との共催) では、上映会に続いて、映画の舞台となった孤児院の運営者による講演が行われ、現代社会においていかに子どもと向き合うべきかというテーマを真摯に考える機会となった。7 月には「ドイツ人。時々、トルコ人。——ムッシン・オムルジャによるカバレット——」と題して、急速に「移民国」化が進むドイツの現状をテーマに、トルコ系ドイツ人のカバレッティストで風刺漫画家でもあるムッシン・オムルジャ氏が、ユニークなパフォーマンスを来場者に披露した。市民を含む約 100 名の参加者は、グローバル社会における文化の多様化についてオムルジャ氏との活発な意見交換を行った。

音楽に関わる活動としては、まず 12 月の「東欧ユダヤ音楽クレズマーの夕べ——シュテットルから世界へ——」においては、クレズマー楽団オルケステル・ドレイデルによる上記の講演・演奏会を市民に門戸を開いて開催し、東欧ユダヤ人社会の生活、文化、風習を、シャガール作品との関連において考察するとともに、同社会の音楽であるクレズマーの中にそれらの反映を確認した。また本学部の研究会補助 (III. 研究活動の項を参照のこと) を受けた大衆音楽研究会が主催して、「ブルースの世界——アメリカのブルース、日本のブルース——」を 2014 年 3 月に開催した。ブルース演奏家である妹尾隆一郎トリオによる講演・演奏会で、市民に門戸を開き日米のブルース文化の共通点と相違点について考察した。

以 上